三角関係の行方は？

――前編――

大スキャンダルで社交界を揺るがせた

エフィー・グレイ

■ヴィクトリア朝時代を代表する美術評論家ジョン・ラスキン（右上絵）の妻でありながら、ラスキンの友人であった画家ジョン・エヴァレット・ミレイ（左上絵）と「許されぬ恋」に落ちたエフィー・グレイ。今回は、著名な2人の男性を翻弄し、前代未聞の一大スキャンダルとして世間を騒がせた女性、エフィーの人生を前後編で追う。

女王に嫌われた女

ロンドンのテムズ河畔に建つ美術館「テート・ブリテン」で、人気の高い絵画のひとつ「オフィーリア」。オフィーリアはシェイクスピアの代表作「ハムレット」に登場する女性で、恋人のハムレットに捨てられ、さらに父親も殺害されて正気を失い、歌を口ずさみながら川底へと沈んでいく。川の流れに身を任せる姿は悲哀に満ちていながらも、夢見るようなロマンチックさも漂わせており、完成から160年以上が経った今も人々を魅了している。

この「オフィーリア」を描いた画家ジョン・エヴァレット・ミレイには、最愛の妻がいた。彼女の名はユーフェミア・チャーマーズ・グレイ、通称エフィー・グレイ。芸術家として初の貴族位（准男爵）を与えられ、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ（王立芸術院）会長という美術界の頂点の座に就いたミレイの妻であったにもかかわらず、その経歴からヴィクトリア女王に嫌われ、エフィーは社交界に足を踏み入れることが許されなかった。

一体なぜ、女王はエフィーをそれほどまでに嫌悪したのだろうか？

打算的な花婿探し

エフィーは1828年、スコットランド中部のパースで、15人きょうだいの長女として誕生。父親はスコットランドで指折りの敏腕弁護士で、グレイ家は経済的に恵まれていた。

子供たちの教育に熱心であった夫妻は、エフィーをイングランドのストラットフォード・アポン・エイヴォンにある名門フィニッシング・スクール（上流階級の子女が礼儀作法を学ぶ学校）に入学させる。革新的なカリキュラムで知られていた同校は、「自己主張」「自己確立」を教育理念に掲げ、女生徒にも討論や論文執筆に取り組ませた。こうした教育方針は、エフィーの聡明さや勝気さ、行動力を培っていった。成績優秀で明るく社交的。ユーモアにあふれる彼女の会話は、そのスコットランドなまりさえチャーミングに聞こえたという。

卒業後、エフィーは英国各地にいる親戚や友人を訪ね、「花婿探し」を始める。自分の夫は自分で決めたい――当時でいう「新しいタイプ」の女性に成長したエフィーは、やがて舞踏会で出会った男性と婚約したが、最終的に伴侶に選んだのは別の男性だった。その人物が、美術評論家として活躍していたジョン・ラスキンである。

約束されたセレブ生活

ラスキンは1819年、ロンドンで貿易商を営む裕福な家庭のひとり息子として生まれた。幼い頃からヨーロッパを両親と旅しながら見聞を広め、成長してからは家庭で厳しい教育を受け

テート・ブリテン所蔵のミレイの代表作「オフィーリア」。写生した小川の風景と、バスタブに浮かんだ女性モデルのスケッチを組み合わせた。

ため、友人はおらず、子供らしく遊ぶこともなかった。その結果、オックスフォード大学へ進学するも、大学や集団生活に馴染めずに体調を崩し、心配した母親が大学の近くに転居。週末には父親も訪れるなど、家族間の結びつきが非常に強かった。

ロマン派文学を好んだ父の影響で、バイロンやウォルター・スコットに親しんできたラスキンは、やがて詩作の才能を開花させ、文筆活動を開始。画家ターナーらとの交流から、1843年に刊行した「近代画家論」で美術評論家として名を知らしめた。

グレイ家とラスキン家はもともと交流があり、パースにあるグレイ家の館もかつてラスキン家が所有していたものだった。ただ、エフィーとラスキンは10歳ほど年齢が離れていたため、互いに結婚相手として意識してはいなかった。だが、ラスキンの母が成長したエフィーに目を留めたことから、運命は大きく動き出していく。

「あの年齢で、彼女ほどの教養を身につけた女性は少ないわ。少し賢(さか)しげだけど、経験を重ねれば思慮深さも備わるでしょう。あなたの活動を助ける妻に適任なのではないかしら」

▲スコットランド旅行中にミレイが描いた、刺繍をするエフィーとラスキンの肖像画。

母の言うことに間違いはない――マザコンの傾向があったラスキンは、すぐにエフィーに求婚した。

突然の話にエフィーは驚いたが、華やかな社交界に仲間入りすることに憧れを抱いていた彼女は快諾し、すでに別の男性と交わしていた婚約を破棄。翌年にラスキン夫人となる。ラスキンは29歳、エフィーは19歳であった。

神童の挫折

一方、その頃の美術界には、伝統や権威にとらわれたロイヤル・アカデミーに反発する若者たちが現れていた。彼らは「ラファエル前派兄弟団」(通称「ラファエル前派」)を結成。イタリア・ルネサンス時代の巨匠ラファエロから続く古典的な手法――つまり、過去の作品から着想を得るのではなく、外へ出て自然を前に写生することや、心に感じたままに描くことの重要性を主張したのだ。そのグループの主要メンバーのひとりが、後に「オフィーリア」を描くミレイである。

ミレイは1829年、裕福な家庭の次男として、サウサンプトンで生を受けた。ジャージー島に領地を擁するミレイ一族は貴族ではないものの、その起源は11世紀にまでさかのぼる旧家であった。ミレイは幼少時から画才を発揮し、史上最年少の11歳でロイヤル・アカデミー付属学校に入学、「神童」ともてはやされた。

しかし、若い力への賞賛は反感も生む。ラファエル前派を創設し、画壇に反旗を翻した途端、作品は情け容赦なく酷評されるようになってしまう。順風満帆の人生を歩んできた21歳の青年に、この批判は大きな衝撃と苦痛をもたらした。悩んだミレイは、友人の仲介で評論家のラスキンに擁護を嘆願。この作戦は成功し、ラスキンが彼らの支援を表明すると、大衆の風向きが一気に変化した。ミレイはラスキンに礼状を送り、以降、親しく付き合うようになっていく。ミレイ、ラスキン、エフィーの運命の歯車が回りだした。

▶同じく旅行中にミレイがスケッチした「2人の師と生徒」。「2人の師」とはミレイとラスキンのことで、「生徒」は絵を習いはじめたばかりのエフィー。右上にいたはずのラスキンは、後にミレイが切り取った。ピッタリと寄り添って座るミレイとエフィーの姿から、仲の良さが伝わってくる。

裸婦像にはないもの

結婚5年目を迎えた1853年、エフィーとラスキンは夏の休暇をスコットランドで過ごすことに決める。ラスキンに招待され、ミレイと彼の兄も交えた一行は、4ヵ月ほど北部のハイランド地方を旅した。

幸福の始まりに思えた「玉の輿」婚は、いまやエフィーにとって悲しみと屈辱に彩られたものとなっていた。発端は、結婚初夜にさかのぼる。

「あの夜、彼は『妻にすることはできない』と謝りました。子供が嫌いだとか、宗教的な信心ゆえだとか、私の美しさを保つためだとか、様々な理由を並べ立て、寝室から出て行きました」(エフィーの手紙より)。

実は2人は一度もベッドを共にしたことがなく、寝室も別であった。多忙なラスキンは家をあけることが多く、また外出しない日は書斎に閉じこもり、顔を合わせることはない。妻に無関心の夫との生活に、エフィーは笑顔を失くしていた。そして25歳の誕生日を迎えた夜、彼女は最後の勝負に出る。

「正式な妻にしていただけませんか?」

テーブルやピアノの脚まで卑猥として布で隠すほどに禁欲的だった時代に、こうした話を女性から切り出すのには相当な勇気が必要だった。それに対し、ラスキンは渋々と答えた。

「エフィー、あなたの身体は私の想像とあまりにもかけ離れ、嫌悪感しか湧かない。絵画や彫刻の裸婦像にはないものがあって、気味が悪いんだ」

ラスキンの言う「裸婦像にはないもの」とは「体毛」を指した。スコットランドへ発つ6週間ほど前のことである。

許されぬ苦難の恋

ハイランド旅行に同行したミレイ兄弟は快活で、ラスキンとは対極の若者だった。エフィーは彼らと小川に入って水をかけあったり、岩場に腰掛けて釣りに挑戦したりした。2人が風景を写生しているときは、その隣で読書や編み物を楽しみ、やがてミレイから指導を受けながら一緒にスケッチも行うようになる。ジョークを飛ばしあい、賑やかに会話する日々に、エフィーは本来の自分を取り戻していく気がした。ミレイの兄が一足先にロンドンへ帰ると、エフィーとミレイの距離は瞬く間に縮まっていく。そして長い休暇が終わりを告げる頃、2人は許されぬ恋に身を焦がすようになっていた。

一方ラスキンはというと、彼らの輪には加わらずに、雲や小川の流れを眺めながら思索に耽ったり、本の執筆や講演会の準備に没頭したりと、彼なりに充実した時間を過ごし、2人の関係の進展にはまったく気づかなかった。

ロンドンに戻ったミレイは頭痛に悩まされ、家にこもりがちになる。孤独感や喪失感に襲われ、ベッドに伏して夜毎泣きじゃくった。エフィーもまた、ミレイ恋しさに意気消沈し、食欲が減退して寝込む日が多くなった。

旅行から半年が過ぎた1854年の春、先に動きだしたのはエフィーだった。前代未聞の離婚劇の幕開けである。

(後編へ続く)